Title	巻頭のことば
Author(s)	小倉，義明
Citation	キリスト教と諸学 ： 論集, Volume27， 2012.3 : 1-2
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3910
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

巻頭のことば

「なんでも鑑定団」というテレビ番組がある。鑑定依頼人が十万円くらいかと値ぶみした掛軸がなんと百万円はすると言われたり、逆に五十万円はするはずだと差し出した壺が模造品で五万円もしないと言われたり、面白い。

この番組で興味深いのは、第一に、自分の所有物について自分でその価値がわからないという点だ。自分で自分がわかっていないという人間の深い問題を象徴している。第二に、価値は数値化されないとわからない、数値に置き換えられてみて初めて納得するという、私たちの感受性の問題である。

＊

現代は数値と量の世界だ。科学と技術において、あらゆるものが数値化され、計量され、部品化され、規格化される。そこでは、いつでも取り替え・置き換え可能であり、ひたすら物量と効率が追求される。

＊

二〇一一年の三陸大津波は、福島の原発事故とともに、現代文明に対して根源的な省察を促している。それは、モノからヒトへ、私たちの関心を回復せねばならないということではないだろうか。家族や友人を喪った人々の悲嘆を見るにつけ、私たちは改めて「いのちの尊さ」を教えられている。死者・行方不明者合わせて一万九千人といった統計では言いつくせない、一人ひとりの人生とその物語がそこにはあったはずなのだ。その、オンリー・ワンという「かけがえのなさ」の感受性を、私たちはとり戻さねばならないのではないか。

＊

国際司法裁判所の判事（二〇〇〇～二〇一〇年）を勤めたトーマス・バーゲンソール教授の少年期の回顧録が、二〇一二年一月に文庫版となった（『アウシュビッツを一人で生き抜いた少年』、朝日文庫）。労働力とは見られない少年たちが、抹殺されていく中を生き抜いて、大戦終結後アメリカ合衆国へ渡る実録である。

貧しい孤独な少年を、奨学金付きで迎えたのが、ウエスト・ヴァジニア州のベサニー大学であった。この本の終章で著者は、こう書いている。「ベサニーは小さな大学だったので、私は教授たちと親密に、個人的に指導してもらうことができた。それは、大きな大学では無理だったことだろう。また、小さいゆえに、私はたくさんの学生と知り合いになることができ、彼らに受け入れられ、自分もベサニー大学の仲間の一員だと感じることができた」（二六七頁）。モノのように抹殺される収容所から、小さな、しかしそれゆえに人間味豊かな教育共同体で育てられたのであった。著者バーゲンソールは、ベサニーを卒業したあとハーバードで学位をとり、国際人権法の教授となっていく。

＊

ベサニー大学は、わが聖学院大学の姉妹校だ。本学も同じ建学の精神に立っており、一人ひとりの生命の尊さを噛みしめて教育にあたる。小規模大学ではあっても、託された使命は大きい。

聖学院キリスト教センター所長
小倉　義明